
MAIL PANIC

久住 なつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MAIL PANIC

【Nコード】

N4119S

【作者名】

久住 なつき

【あらすじ】

和也はクラスを中心にいて、片想いをしている里枝子の携帯を拾った。

ところがうまく返せずに携帯は鞆の中に。さてどうしようと思っていると、翌日みれいという子の携帯が盗まれた。みれいの携帯からクラスに一斉送信が。そして和也の拾った枝里子の携帯にもみれいの携帯からメール受信。「あなたは誰？あなたはなぜこの子の携帯を盗んだの？」

前半

相川里枝子様へ。

なんて。決して面と向かって言うことなんて出来ないのだけれど。何か蹴ったと思ったら、携帯電話だった。俺は君の携帯を拾った。携帯を失くしたら困るだろうなってことは容易に想像がついた。

だから君に話しかける勇気が無いなら、他の男子にでも頼んで渡してもらえば良かったかもしれない。

君と話すきっかけが欲しい男子なんて余るほどいるのだから。

しかしこの機会を逃したら俺にはもう二度とチャンスは無いと、それこそ想像の余地も無く想像がついた。

中一の時、夏休みの夏期講習でクラスの違う君と初めて喋って、そして君は僕に消しゴムをくれた。

そんなちよつとのことだけど、笑顔がとにかく可愛かった。

だからつい、五度目の話しかけに失敗し君が派手な女友達と校門を出たところで俺は

「明日でいつか」と君のシンプルだけどおしゃれな携帯を自分の鞆に入れ持って帰ってしまったんだ。

家に着いて鞆から君の携帯を出してみた途端、何故こうなってしまったんだと

自分の行動を死ぬほど後悔した。

携帯はすぐに鞆にしまい、捨てたい衝動を抑えながら鞆ことなるべく部屋の隅に置いた。

君からしたら迷惑以外の何ものでも無いということは分かっている。でもこれだけは神様に言わせて欲しい。

決して携帯を盗もうとしたわけじゃない。ただ君と話したかっただけ。恋したかっただけなんだ。

何のストラップもデコレーションも無い、見た目には何ら持ち主の影響を受けていない携帯を

すぐに君のだと分かる程度には目で追ってしまっていたから。

佐伯和也。 中学三年生。

中一の秋、いじめられた友達を庇って自分が標的になりクラスから孤立。

その庇った友達に裏切られてから中三の今までこの学校に友達は居ない。

今のクラスでは嫌われてこそいないもの、話相手も居らず休み時間はよく寝ている。フリの時も多い。

学校以外で面白い友達が何人が居たし、親も優しいし、高校になったらきつといい出会いもあるはず。

そう思っただけをこなしってきた。時々つまらなすぎてここから逃げたくなるけれど。

今つまらない分、将来に投資しようと勉強やらギターやら出来ることをし

平穩に中学生生活を終えるはずだった。のに、今それを脅かすことが起きている。

今日こそは渡そうと鞆に入れた里枝子の携帯が気になって仕方ない。なんだかんだで今日も全ての授業が終わり、残りは夕礼だけになっってしまった。

しかし今日こそ渡さなければこちらの身も持たない。

夕礼が終わったなら里枝子の友人達より早く彼女の席に行って謝って返して去ればいい。

拾った携帯をきっかけにちょっとでも仲良くなれたらなんて邪に考へなければ実に簡単なこと。

そう自分に言い聞かせたものの、里枝子は常に派手で気も強いと思われる女子や

どこからその自信はくるんだと言いたくなるような男

子に囲まれていて
非常にやりづらい。そういうクラスを取り仕切るグループは排他的
であるから。

和也は夕礼の直後に懸けていた。

5限を終え夕礼を待つ私語に溢れた教室を、女生徒の声が切り裂いた。

「ねえ携帯が盗まれたんだけど！」

ヒステリックな声と「盗まれた」という不穏な言葉に教室が一瞬静かになる。

和也のは心臓は一度ドキリと跳ねた。

しかし背中に冷たいものを感じるのでは無く、ただただ「え」と思考が止まった。

叫んだ声の主は相川里枝子では無く、澤田みれいとゆう女子生徒だったからだ。

澤田みれい。里枝子と同じクラスを取り仕切るグループにいる。

そのグループ以外の生徒から言わせると「怖い」。

みれいの机の上は机と鞆の中から出したと思われるもので散乱しており、化粧をした顔をゆがめていた。

みれいの隣には里枝子ともう山田優子がいた。二人は困ったように顔を見合わせている。

クラスは静まったままだ。みれいはまた声をあげた。

「さっきまで絶対机の中にあつたの！盗まれた以外考えられない！」

クラスを中心グループにいる宮田雅人が言った。

「お前よく見たの？盗まれたとか言う前によ」

宮田がそういうと周りにいた他の男子数人も口々に似たようなことを言い

何人かの女子が「ねー」とうすく笑った。
するとおずおずと里枝子が喋り出した。

「あの、本当にみれいちゃんの携帯はさっきまであったの。弄ってたし。私達がトイレから戻って来たら無くなっていて。盗まれたかは分からないけど、無くなってしまったのは本当なんだ」

教室が静かになる。宮田と男子数人は今度は静かに里枝子を見ていた。

先ほど笑った女子はどこか居心地悪そうに髪の毛をいじり出した。
こういう時だけ良いタイミングで担任がやってきて、事情を聞くと「じゃあ見つけた者は澤田に教えなさい。だから俺は携帯を持ち込みを許可するのに反対したんだよな」と

何の意味も無い言葉を言つて職員室へ帰って行った。

和也はすっかり里枝子に携帯を返せなくなってしまった。

みれいと里枝子を含む仲の良い女子数人が何やら喋っていた。

「え！里枝子も昨日無くしたの？！」という声が聞こえた。

みれい達が「全員鞆の中を見せろ」と言いだされないうちに急いで教室から出た。

みれいの携帯は本当に盗まれたのか？犯人はいるのか？だとしたらクラスメイトの誰かなのか。

そして里枝子はどう思ったのだろう。

私の携帯もどこかに忘れたのかと思つたら盗まれたのだと考え出しただろうか。

皆の前で言わなかったのは里枝子だから。里枝子が余計な波風が立

ちことを嫌う性格だというのは
クラス行事などで里枝子の姿を見てきてよく知っている。
しかし和也は歩きながら今度こそ背中が冷えるのを感じていた。
この携帯を持っているのがばれたら、きつと何を言っても自分は犯
人にされる。

その夜、和也は従兄弟の大輝に電話して一から全てを話した、里枝
子が好きだということは伏せて。

大輝は今高校二年で大阪にいる。ギターも大輝に教えてもらった。
信頼している友達の一人だ。

大輝は聞いてまずふははと笑った。

「あほやなあ。お前は相変わらず要領が悪いつちゅーか、運の無い
やつやなあ」

あほと笑われると意外に気が楽になるもので、だから和也は大輝に
魅せられ、頼ってしまう。

「大輝さんだった要領良い方じゃないでしょ。まあ今はいいや。そ
れで携帯を捨ててしまうことも出来ないし、でも返すことも出来な
くなって困ってる。このまま家に置いておけば、クラスの誰かにば
れることも無いと思うんだけど、なんかそれって最低だし」

「んー、まあとりあえず明日はその携帯は家に置いとき。早まって
捨てたらアカンで。そのみれいちゃんって子の携帯が本当に盗まれ
たんかも分からんし、もし出てきたら里枝子ちゃんって子に正直に
言つて渡せばええ。出てこんかったら、その時はまた一緒に考えた
るさかい」

「ありがとう、大輝さん。また電話してもいい？」

「ふは。あほ」

そうして電話は切れた。少し気の晴れた和也だった。

そして、翌日の昼休み。まだ昼休みが始まったばかりでお昼を買いに購買に行った生徒も多く、教室に半分くらいの生徒がいるときだった。

教室の何人かの生徒の携帯が同時に鳴った。メール受信。

教室が「やだー」「嘘ー」「うわまじかよ」「これって本当？」とざわつく。

和也はメールを受信したらしい前の席の男子生徒の携帯をこっそり見た。

それに気付いた男子生徒がいつにないフレンドリーさで「お前も見るか」と携帯を渡してきた。

「ねえ知ってる？澤田みれいは二股女。相手はクラスの宮田と大学生。相川里枝子は純情そうに見えるけど違う。初めては中二。山田優子の彼氏は万引きするような馬鹿。西川愛は男子なんてカスばかりが口癖。堀江秋子はこの年で男に貢がせてる」

クラスを中心グループの女子の誹謗中傷だった。幸いと言って良いか分からないが

そのグループは今教室にはいない。

和也は里枝子という文字を見て、書かれた内容を見て、急に周りの酸素が薄くなった気がした。

「これまじかな。やべーよな。てか宮田とみれいって付き合ってたのかよ」

男子生徒が笑う。そして和也から携帯を取り上げると「おい見ろせてやるよ」と
教室に戻ったばかりで「何どうしたの？」と言っている生徒の方へ向かった。

（たまたま受信しただけで、英雄気取りか。こんな内容のメールを）

和也はその男子生徒を殴って殴って、倒してしまいたかった。

行き場のない怒りを全てそいつにぶつけてしまいたかった。堪える。頭を働かせる。

メールの受信元は澤田みれいとなっていた。

無くなった昨日のうちに解約をしなかったのか。盗まれたと考えていたのに何故。馬鹿野郎。

しかしこれで盗まれたというのは確定した。一体誰が。何のためにみれい達のグループが帰ってきた。男子のグループはまだ購買に居るのか姿は見えない。
騒ぎに気付かないはずがなく、近くの女子生徒の携帯を取り上げた。

「てめーこれ見て笑ってたのかよ」

「ちょっと、携帯返して。笑ってなんかないよ」

「じゃあさっきの楽しそうな笑い声は何なんだよ」

みれいの声がした。今回の言い分の理はみれいの方にあるのかもしれないのに

しかし普段の彼女達の態度を思うと女子生徒の方に同情しなくなってしまうのだった。

里枝子を見ると携帯の内容を読んだのか顔が青くなっていた。

優子、愛、秋子は泣き出したり、周りの生徒に詰め寄っていた。

周りの生徒はそんな彼女達と関わりたくないといった様子で教室から出たり

携帯をしまつて食事に精を出し始めていた。

誰も彼女達を心配したり慰めたりしようとしていないのがよく見て取れた。

誰が、何のために、こんなメールを送ったのか。そう思った。

しかこの教室の誰でも愉快犯でも行き過ぎた恨みでもあり得るのか
もしれない。

そんな恐ろしいことが和也の頭に浮かんだ。

前半（後書き）

ねえ知ってる？はCMのえだまへの犬からいただきました笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4119s/>

MAIL PANIC

2011年10月3日01時31分発行